

〈論文〉

合気道の一般普及と海外展開

—近代における日本文化の変容と伝播に関する一考察—

The Popularization and Overseas Expansion of Aikido:

A Study on the Transformation and Dissemination of

Japanese Culture in the Modern Era

向井 晃子

MUKAI Akiko

Summary

This paper examines the postwar development of aikido, a uniquely Japanese martial art originating in the modern era, and sheds light on the cultural transformation and evolution of Japanese society as it underwent Westernization and modernization. Aikido was founded by Morihei Ueshiba (1883-1969) in the early Showa period after studying various martial arts passed down from the Edo period. Its purpose is not to compete against one another or participate in matches or tournaments, but to train the mind and body. During the Edo period, "geijutsu(芸術)" (art) referred to "kenjutsu(剣術)" (swordsmanship). However, from the Meiji to Taisho periods, "kenjutsu(剣術)" (swordsmanship) and "bujutsu(武術)" (martial arts) evolved into terms that incorporate the "do (道)" (way), such as "kendo (剣道)" and "budo (武道)", and these terms also incorporated spiritual connotations. Meanwhile, during the Meiji period, under Western influence, the modern Japanese terms "geijutsu(芸術)" (art) and "bijutsu (美術)" (fine arts) were established. Examining the historical fact that there are genres excluded from this narrow definition of modern art is important for reexamining the very definition of modernity. How has this Japanese genre, which falls outside the framework of Western art and fine art, developed? This article examines the spread and international expansion of aikido, using the spread of a modern genre rooted in Japan's cultural background as an example.

キーワード

日本文化、近代、芸術、武道、海外展開

1 はじめに

本研究は、近代に発祥した日本独自の武道である合気道をテーマに、その戦後の展開を見ることで、欧米化と近代化の進む日本社会における文化の変容とその展開の一端を明らかにする。合気道は、昭和初期頃に植芝盛平(1883～1969)（以下、開祖）によって創始された。「取り」と「受け」の二人組で技を行って心身の錬成を図るのを目的としており、相手と優劣や勝敗を競わず、試合や競技を行わない特徴がある¹。

本稿を着想した契機は、合気道家多田宏との出会いによって、拙研究で扱った前衛書を主題とした日本近代における芸術のカテゴライズに対する問題意識が発展したことによる²。多田は、開祖の直弟子で、戦後に国内外で合気道普及に尽力し、イタリアで合気道団体を立ち上げ、2018年にイタリア星勲章「カヴァリエーレ章」を受賞した。95歳の現在も、自身が主宰する月窓寺道場と自由が丘道場を中心に、現役で活動している。江戸期の剣術の伝書である『天狗芸術論』や『芸術大意』の存在を指摘し、そもそも明治維新以前には「芸術」とは「武芸」、「武術」を指したと述べ、合気道を日本の伝統的な文化を背景とした「芸術」として捉え、実践している人物である³。

文化や芸術の視点から武道を扱う先行研究は多くはなく、それについて、スポーツ科学の研究者工藤龍太は、『近代武道・合気道の形成:「合気」の技術と思想』で、日本武道学会の専門分科会が武道の種目（柔道、空手道、剣道、相撲、弓道、なぎなた）で分けられており、人文科学や自然科学等の研究の方法論で区分されていないことを指摘している⁴。工藤は同書で、武道史的観点から合気道を取り上げ、「合気」という概念に注目してそれを技術と思想から論じた。そのような中、美術史家の稲賀繁美は『合気道』の近代—その戦前から戦後への断絶と継承』を著し、合気道を主題に西欧近代の芸術観が日本の近代にどのような作用を及ぼしたのかという観点から、合気道における戦前と戦後の連続性と非連続性について論じている⁵。稲賀はここで、西欧発祥の近代美術の概念が、地理的にも局地的であり、歴史的にも特殊な背景を持つ概念であるとする見方を前提に、「武術 martial arts が狭義の近代的な芸術 fine arts からは排除された、という歴史的事実そのものを究明することが、近代なる規定が如何なるものだったのかを再認識するためにも、有効であることを述べている⁶。加えて、「芸術」という言葉について『天狗芸術論』を例に、東洋で「芸術」とは剣術の技能を指していたと指摘し、日本近代の特徴の例として、1882年に「柔術」が「柔道」へ、1919年に「武術」が「武道」へ、それに伴い「剣術」が「剣

¹ 公益財団法人合気会 Web（以下、合気会 Web）「合気道とは」、<https://aikikai.or.jp/aikido/>、2026年1月23日最終閲覧。

² 向井晃子『戦後前衛書に見る書のモダニズム—「日本近代美術」を周縁から問い直す』三元社、2022年。

³ 多田宏『合気道に生きる』日本武道館、2018年。向井晃子「日本伝統文化を背景とした『芸術』と『観想』—合気道家多田宏の稽古の言葉より—」年報 Promis,3(1)、神戸大学、2025年、77-85頁。

⁴ 工藤龍太『近代武道・合気道の形成:「合気」の技術と思想』早稲田大学出版部、2015年。

⁵ 稲賀繁美『合気道』の近代—その戦前から戦後への断絶と継承』E・クロッペンシュタイン編『日本文化の連続性と非連続性 1920-1970年』勉誠社、2005年、297-321頁。

⁶ 稲賀『合気道』の近代」、298頁。

道」へと変化した言葉の変遷を見ている⁷。そして、「西欧近代に模範を仰いだ極東の立憲君主国は、西欧化の過程にあって、『術』を『道』へと読み替える選択を取った」と述べ、「ここで近代化とは、一面では、技能（＝藝）とは一線を画した別種の精神的営みとしての藝術（＝道）という観念の成立によって定義づけられる」と論じている⁸。拙著『戦後前衛書に見る書のモダニズム―「日本近代美術」を周縁から問い直す』でも論じたとおり、日本では、欧米を模した近代の美術制度の枠組みからこぼれ落ちる日本独自のジャンルがあった⁹。しかしその一方で、「道」という言葉によって、精神的な営みとしての日本独自の芸術観が成立していたことになる。本研究ではこうした先行研究を受けて、日本の文化的背景に根ざすジャンルの展開の一例として、戦後の合気道の一般普及と海外展開に注目し、第2章では国内での一般への普及を、第3章では海外への展開を見ていき、いかにそれが成され得たかを考察して、その変容と伝播の一端を明らかにする。戦後の合気道の発展について稲賀は、戦前から開祖の下で学んだ有力な人材が戦後に独立した傾向と同時に、最大の組織である合気会に留まり活動を続けた合気道家の存在を述べ、合気会だけでない多様性を孕み始めた点を指摘している¹⁰。本研究では、合気会以外の合気道団体が存在することは前提としつつ、最大の組織であり開祖直系と関わる現在の公益財団法人合気会（以下、合気会）に関連する動きを対象とした¹¹。本稿の執筆に際し、文献調査に加えて、合気会所蔵の資料調査を実施し、合気道の海外普及に携わった人物に聞き取り調査を行った。

II 合気道の国内での一般普及

本章では、第1節で戦前、戦中の合気道の教授状況を確認した上で、第2節で戦後の合気道の変化を見て、その要点を明らかにする。第3節では、戦後の合気道の実践の場の増加を確認し、一般雑誌での合気道記事を分析して、どのように合気道が取り上げられて普及したのかを考察する。

2.1 戦前、戦中の限られた層への合気道伝授

合気道は、1883年、田辺（現在の和歌山県田辺市）の農家出身の開祖が18歳で上京、数々の武術を修行の後、昭和初期に創始したものである。ただ、合気道という名称が正式に名乗られるのは、1942年であった¹²。稲賀は、弾圧された大本教と密接なつながりがある

⁷ 稲賀『『合気道』の近代』。

⁸ 稲賀『『合気道』の近代』。稲賀は、近代以前には西洋語でも武術的な技芸観が arts として存在したことを指摘している。

⁹ 向井『戦後前衛書に見る書のモダニズム』。

¹⁰ 稲賀『『合気道』の近代』、311頁。

¹¹ 合気会は、合気道道主を支援する団体である。現在、開祖の直系である合気道道主が会の代表を務めているが、代表は互選で決定され、必ずしも道主が会の代表とは限らない。2026年1月29日、合気会への照会。

¹² 「合気道年譜」植芝吉祥丸『合気道一路』出版芸術社、1995年、289頁。同年譜には、1922年に「武道の真髓を『合気』と呼称した」との記述もある。

ったものの、戦前の政財界や軍からの支援を得て財団法人の資格を取得し、満洲国の経営という戦前の国策へ関与したことが、合気道の社会的認知に役立ったと述べている¹³。

ここでの社会的認知とは、一般に広く知られるというよりも、国家を動かすような影響力を持つ社会階層への浸透という意味合いが強いと見て良いであろう。なぜなら、戦前、戦中には、開祖自身が弟子入りを厳しく制限し、道場はごく限られた層にのみ開かれていたからだ¹⁴。入門に当たっては、身元の確かな二人以上の保証人を条件として、しかるべき紹介者のいない者は入門が難しい状況であった¹⁵。そうした中、1925年に海軍大将の竹下勇が、1926年には宮中関係者や海軍高官、薩摩閥、財界の名士たちが入門し、有力な後援者となっていった。1927年、開祖は京都から東京へ転居して各界名士の指導に当たる。道場は島津侯爵邸下屋敷内に開設され、それまでに指導した華族、陸海軍高官、実業家らが稽古に通った。興味深いのは、「それらの方々の子、うならば名門の令嬢たちが十数名も稽古に見え、厳しい道場にどこか和やかな空気を漂わせていた」と伝えられていることだ¹⁶。歌人の柳原白蓮や大本教の出口直日が京都の道場へ通ったことを見ると、東京転居以前から、女性も受け入れていたことがわかる¹⁷。また、出口は後年、開祖は稽古で女性を手加減しなかった思い出を語ったという¹⁸。1932年に入門した国越孝子も、稽古で開祖の受けを取った経験を「女だからって容赦はしてくれないですよ」と語っている¹⁹。一方で、「人数が少なかったせいもあるかも知れないけど、昔の方が和やかな感じね。今は(筆者注：1981年、1992年の取材)それこそ学校という感じ」と、当時を振り返っている²⁰。これらの記述からは、戦前は、社会的階層の高い名士たちが稽古に通うと同時に、女性にも門戸が開かれて開祖は男女の区別なく教授を行っており、比較的アットホームな雰囲気もあったことがわかる。開祖は、海軍大学や陸軍大学、政財界人にも指導を行い、満州でも公職についた。しかし、太平洋戦争が開戦され、戦局が悪化するとともに道場への新規入門者よりも出征者が圧倒的に多くなり、1942年、開祖は公職を辞して茨城県の岩間へ転居し、東京の道場は後に二代目道主となる植芝吉祥丸（以下、吉祥丸）が道場長として引き継いだのだった。では、戦前には、社会的立場の高い一部の層に向けて伝えられていた合気道が、戦後にどのように変化していったのか、次節ではそれを見ていこう。

2.2 戦後の合気道一般公開

限られた層のみに伝授されていた合気道は戦後、一般へ公開された。その変化はなぜ、どのように起きたのだろうか。本節では、それを見ていこう。

¹³ 稲賀『『合気道』の近代』。

¹⁴ 植芝吉祥丸著、植芝守央監修『合気道開祖植芝盛平伝』出版芸術社、2016年。植芝守央『合気道その歴史と技法』日本武道館、2022年。

¹⁵ 植芝『合気道その歴史と技法』。

¹⁶ 植芝『合気道開祖植芝盛平伝』、190-191頁。植芝『合気道その歴史と技法』、55-56頁。

¹⁷ 植芝『合気道開祖植芝盛平伝』。戦後に政治家として活躍した大石ヨシエも京都の道場へ通った記述がある。植芝吉祥丸「戦後合気道夜話2」の記述では大石については終戦当時の話とも読める。

¹⁸ 植芝『合気道開祖植芝盛平伝』。

¹⁹ 合気ニュース編集部編『植芝盛平と合気道 I 開祖を語る直弟子たち』合気ニュース、2006年、144頁。

²⁰ 合気ニュース編集部編『植芝盛平と合気道 I』、142頁。

東京の道場は奇跡的に戦災を免れたが人々の避難所となり、多いときは 100 人近い人々で道場が埋まったという²¹。また、進駐軍の司令や軍国主義の反動により、国内外から武道へ対しての風当たりが強かった。当時の様子を、吉祥丸は次のように述べている。

約二年余りの中断の後、私どもは焼け残ったとは言え見る陰もない道場で稽古を始め道の復興を願った。然し昭和二十七、八年頃迄は、花より団子、先づ食をという時代、私どもが此の道の修業（原文ママ）に朝早くから精進しているのを見て気違い沙汰という批評をこうむったものである²²。

国との関わりにおいては、1948 年、「財団法人合気会」が、他の武道関係諸団体に先駆けて文部省に認可される。稲賀は、合気会認可申請書に、戦後の価値観と調和して理想を描き出す姿勢を見出している²³。そして、戦後に合気道が広く普及した要因として、（1）演武会形式による一般社会への公表と勧誘を行い、閉鎖的な武術習得から広範な普及を目指す社会事業へ変貌したこと、（2）会社同好会と各大学に合気道部設立の 2 点をあげるとともに、海外への普及も見逃せないと述べ、その背景として、戦争から平和の時代への社会の変化を見ている。たしかに、一般への公開なくして、今日の合気道の普及はあり得なかつたはずだ。ただ、特別な名士を対象とするコミュニティを広く一般へひらく道筋は、容易ではなかつたであろう。それを実行したキーパーソンは、吉祥丸であつた。そもそも開祖には、不特定の一般市民へ合気道を公開する考えはなかつた。稽古場には門人のみが入場可能で、合気道の演武会は開祖のみが取りを務め、ごく限られた人のみが見ることができた。吉祥丸は「多くの方は武道界においてすら、植芝盛平の名は知っていても、その技を直に見た人はそれほど多くなかつたはずですよ」と述べている²⁴。しかし、吉祥丸は、戦後の合気道の復興は、一般への普及によってこそ成されると判断し、合気道の一般公開演武開催を考えた。そしてその演武においても、

稽古さえすれば、誰にもできるものだというを示すためにも、公開演武では、従来の慣例を破り、稽古をしているものは全員で——内弟子であろうと、昨日今日入門した者であっても——演武する必要がある²⁵

と考えたのだつた。現在では定着しているこのスタイルは、当時は慣例を破るものだったのである。このアイデアについて開祖は当初、自らの合気道が誤解されると考え、猛反対であつた。厳しいやりとりの末、最終的に開祖が、実の息子である吉祥丸に協力した外部のブレーンを信頼する運びで、許可を下す形となつたことが伝えられている²⁶。

²¹ 植芝『合気道一路』。

²² 植芝吉祥丸「稽古ごと」日本之経済 1972 年 5 月号、経済新潮社、16 頁。「気違い」は、現在のメディアや公共の場においては明確な不適切用語とされているが、引用中の語句でありそのまま使用した。

²³ 稲賀「『合気道』の近代」。

²⁴ 植芝『合気道一路』、144 頁。

²⁵ 同上、144-145 頁。

²⁶ 同上。

PROGRAM
Practice of
AIKI-DO

合気道

演武次第

演武 合気道総本部 植芝道場

9月28日—10月2日
● 毎日午後3時から

会場 日本橋高島屋特設道場
主催 読賣新聞社
報知新聞社



3つの星が
3つの幸運をもたらす

☆ 編物コンクール
☆ 写眞コンテスト
☆ 抽せん券付売出し

オリオン毛糸

大日本紡績製品
発売元 伊藤萬株株式会社



70年の信用

朝日生命

合気道

元内閣書記官長 富田 健治

私は廿数年間植芝先生の教えを受けて来たが
教えを受ける度に、一つか半分、心にしみ微て
行くものがあることを覚える。之は身付的なもの
でなく、心的なものである。自然に身に沁みて
もらう要の教えである。私は今生生きて居る限り
この合気を受けて行き度と思ふ。そうすれば進
事だけは例え半歩でも進み得る。そしてそれは、
一個の相手方などと言うと言ふやうなものだ
ない。何千人の心を自分の思ふまゝにする道であ
り、日本を建て直すことあり世界を平和に持っ
てゆく道に必ず通じていると確言する。之が私の
今日の合気道である。

植芝先生を語る

合気道副会長 藤田 敏哉

六年の間程しく接した印象を簡単に申せば實語
に於ける武道の達人と言ふより外は有りません。
誠に世に一人生まれるかどうか分らぬ不出生
の天才の方で現在我國に活躍する人間ありとせば
老先生を第一に指定せらるべき方ではないかと信
じます。

この合気道の創始者植芝先生の天和神性が合
気道の形を取つて世に出現して居る次第であり
ますが、此の合気道の精神が日本再建の上に終極
の方面に向つて深く関心を持たれん事を切望す
るものであります。

合気道総本部 東京都新宿区西新宿一〇二
植芝道場 電話(34)8828(都電東大丸線下)

CHIEF BUREAU of AIKI-DŌ,
Ueshiba
102, Watanabe-cho, Shinjyo, Tokyo.
TEL : (34) 8828

図1 「合気道演武次第/PROGRAM Practice of AIKIDO : 外面」、1955年 (合気会所蔵)

What is AIKI-DŌ ?

AIKI-DŌ is an art of defending oneself with minimum effort of one's own ; it comes from all essential arts of Japanese traditional military accomplishments including swordsmanship, wrestling and Ju-jitsu.

AIKI-DŌ basically demands a close coordination between physical and mental powers. After learning the knack of unifying these two powers, anybody can make a progress up to taking advantage of his adversary's strength and momentum.

One salient feature of AIKI-DŌ, in particular contrast with other arts of Self-Defense is that it discourages "hold techniques", the fine point being to throw your opponent by letting him take a hold on you. But the most important way of AIKI is not only to beat the adversary, but also to subdue him without injury.


The originator of AIKI-DŌ is Mr. Morihei Ueshiba, who is 74 years old. He passed his long life to study all kinds of Military Arts in Japan. Having mastered all of them, he at last originated AIKI-DŌ through the deep study of his. He taught AIKI only to some members of Japanese. But now, all the circumstances have been changed, and in the civilized world this art must not be kept in secret.

It will be, moreover, able to be practiced by both sexes and children, and all over the nations, because there is no better arts for keeping one's body safely at any dangerous chance.


演武次第

PROGRAM

1. 開会の辞 Opening Address. 伊藤 達 史 J. Ito
2. 紹介(合気道について) Outline of AIKI-DO. 藤田 敏 哉 K. Fujita
3. 徒手変化技 Variable Arts of AIKI with no arms. 本 部 長 植 芝 吉 祥 丸 K. Ueshiba
A. 立 業 Standing Arts
B. 坐 業 Sitting Arts
4. 少年組入演技 Standing basical Arts of younger members. 本部四段 山 口 清 吾 S. Yamaguchi
5. 試合型自由技 Liberal Arts for Fighting. 本部六段 斎 藤 守 弘 M. Saito
本部四段 有 川 定 輝 S. Arikawa
本部四段 山 口 清 吾 S. Yamaguchi
本部四段 多 田 宏 H. Tada
本部四段 酒 井 敦 雄 K. Sakai
本部三段 西 尾 昭 二 S. Nishio
6. 体のこなし(一般的健康法) Natural Movement of Body. 本部七段 大 沢 吾 三 郎 K. Osawa
本部五段 奥 村 繁 信 S. Okumura
7. 徒手練習技 Training Arts With no Arms. 初 段 アン ド レ ・ ノ ケ Andre Noquet
8. 護身応用技 Defending Arts. 本部四段 多 田 宏 H. Tada
本部初段 砂 泊 光 恵 Miss. M. Sumadomari
9. 多数者攻撃 Defending against many assualants. 本 部 長 植 芝 吉 祥 丸 Chief Leader : Ueshiba jr
10. 模範演武 Pure Arts. Move. of spirit. 合気道創始者 植 芝 盛 平 Originator : M. Ueshiba



二代道主
植芝吉祥丸氏
K. Ueshiba



合気道創始者
道主 植芝盛平氏
M. Ueshiba

合気道について

合気道は植芝盛平氏に依つて創始され完成された武道であります。植芝氏は此の道を得ようとして大東流柔術・神流流柔術・相流流柔術・柳生流柔術・宝蔵院流術等各種の武道を究め更に進んで精神的修業にもあらゆる難業を重ねたのであります。此の武道は素直な力と調和された動きが精神に依つて、こんら体となつて表現されたもので其の動きは美しく、其の内包する力は誠に恐るべきものがございませう。故に此の真髓を把握すれば何時如何なる処に於ても、平然と事に処し、大兵衛武者を制する魂力が養成される驚くべき幾多の事例が有ります。

合気道を入成は「舞なり」と言ひ或は「一撃必倒の恐るべき技なり」と言ふもその一端を語るものでありませう。一度合気道の真髓に接するや、人々は唯々その微妙の業に感嘆おかず、柔道界・剣道界・角界、はては歌舞伎・舞踊等の第一人者、更には政府界の名士等相次いで入門し其の顔ぶれは誠に絢爛多彩を極めて居ります。

昭和十二年財団法人として發足した總本部植芝道場に於ては、現在二代道主の植芝吉祥丸氏を中心に各地に支部を持ち遠く米國・仏國・ビルマ等海外からの入門者も跡を断たない状態にあります。

図2 「合気道演武次第/PROGRAM Practice of AIKIDO : 内面」、1955年 (合気会所蔵)

そして1955年、下記の概要で公開演武が開催された。

- ・日時：9月28日—10月2日、連日午後3時から
- ・会場：日本橋高島屋特設会場
- ・主催：読売新聞社、報知新聞社

当時の「合気道演武次第/PROGRAM Practice of AIKI DO」(図1、図2)を確認すると、日英のバイリンガル表記であり、外国人のアンドレ・ノケ(当時初段)も演武者に名前がある。そして和文でも、アメリカ、フランス、ビルマといった海外からの入門者の存在が伝えられている。戦後の合気道は、初の一般公開時にすでに海外への普及も開始されていたのだ。海外への普及については、第3章で見ていくこととする。

新聞に掲載された演武会の告知には、非常に大きな反響があり、百貨店のショーウインドーにも合気道の写真が飾られ、新聞やラジオでも、その様子が報じられたと伝えられており、各国の大使や公使、財界人にも案内がなされ、パナマ大使は稽古に通うようになったという²⁷。この公開演武について、吉祥丸は、

もし、この演武会を父の神技にのみ頼り、最初から最後まで父が単独演武をしたとすれば、見に来てくださった方々も親近感をあまり持てなかったかもしれません²⁸。

と記している。これらを見ると、「開祖の神技だけではない誰もが親しめる合気道」という方針が、合気道の一般普及へ向けての要点として考えられ、公開演武もそのようにプログラムされていたことが分かる。稲賀は、「術」を「道」と読み替える19世紀後半から20世紀前半にかけての変遷において、「担い手の独創性よりも求道性、伝統の継承性に力点を置く分野で、「道」の文字が好まれる傾向を一般に確認できよう」と述べている²⁹。戦後の合気道の事例においては、求道性や伝統の継承性が保持されつつ、「誰もが親しめる」という方針の転換がなされ、一般にひらかれていったことが認められる。

2.3 実践場所の増加と雑誌を通じた合気道普及活動

前節では、吉祥丸の方針によって一般公開演武が開催され注目を集めたことが、合気道が広く一般に知られる契機であったことが分かった。では、それがどのように持続した入門者の増加へとつながったのであろうか。本節ではそれを見ていこう。

吉祥丸自著の合気道年譜では、1954年に「各支部結成、各大学に合気道クラブの結成を

²⁷ 同上、147-148頁。

²⁸ 同上、149頁。

²⁹ 稲賀『『合気道』の近代』、300頁。

心がける。この頃より画期的な組織の発展来たす」とある³⁰。実践の場が増加したのだ。多田は著作で、1950~1952年頃に、大学へ合気道を普及する計画があり、吉祥丸とも相談していたと記している。その端緒は1951年春に植芝道場で開催される合気道講習会のポスターを早稲田大学で掲示し、会員を募集したことだったが、当時、参加者はなかった。「一般の人々も日常の生活を立て直すのに懸命であったから、未だ聞いたこともない合気道に時間をかけるゆとりがなかったのであろう」と多田は当時を振り返っている³¹。数年後には状況が変わり、例えば、1957年に慶應大学、1960年に早稲田大学、1961年に学習院大学に、合気道会が発足した³²。1958年には、大蔵省印刷局の合気道クラブに12名の女子部員がおり連日30分から1時間の稽古に励んでいることが雑誌で報じられている³³。

ただ、実践の場が続々と開設されたとはいえ、そこへ入門希望者が継続するには、合気道への注目が持続される必要があっただろう。そこで、一般普及開始以降どのように合気道が眼差されていたのかを、雑誌資料から明らかにする。今回、合気会所蔵資料の調査を行い、合気道に関する記事が掲載された一般雑誌より、1955年から1973年までの46冊を分析した。合気会本部の木造道場は、1968年にビルに改築、1973年には増築された。戦後の一般普及はこの時期までに確立されたと見てよいであろう。掲載記事を概観したところ、傾向としては、1. 開祖関連：来歴・武勇伝、演武の写真等、2. 吉祥丸関連、3. 小中高校生向け（吉祥丸による監修記事等）、4. 合気道門人の紹介、5. その他、に大別できる。それが表1である。

ここからは、開祖だけでなく、門人を対象とする記事も同様に多く、一日体験記等合気道の稽古に関する実際的な紹介記事もあることが分かる。特徴的であるのは、表1に記載のとおり、複数の記事で合気道の護身術としての有効性が紹介されている点である。特に1958年には中学生向け雑誌に4回、合気道を護身術として用いる方法が、吉祥丸監修で掲載されている。例えば、「だれにもできる護身術」では、合気道は次のように述べられている。

合気道の原理は自然の動きに順応し、自然と一つになることだとあります。

（中略）無理な力を使わずに、くるりくると体をまるくさばきつつ、相手をその動きの中へ完全にまき込んでしまいます。

どんなに力のない人でもこの原理を身につければ、大男や荒武者を自由に扱うことができます。この点は護身術の最もたいせつな点と一致するのです³⁴。

そして、「いきなり胸ぐらをつかまれた時には」など、護身が必要なケースが複数想定され、図解入りでその対処が解説されている。また、1958年の雑誌記事「女性たちは自衛する」でも、「さて、個人の痴漢対策だが、これは護身術ということになるろう。それで注目

³⁰ 植芝『合気道一路』、289頁。

³¹ 多田『合気道に生きる』、253頁。

³² 多田『合気道に生きる』。

³³ 「女性たちは自衛する」週刊アサヒ芸能1958年4月13日号、東西芸能出版社、1958年、18頁。

³⁴ 植芝吉祥丸「だれにもできる護身術」中学生の友1958年2月号、小学館、132頁。

され、活気を呈してきたのが合気道（あいきどう）である」と述べられ、東京有楽町に新設された

表 1：一般雑誌にみる合気道関係記事

No.	記事タイトル	雑誌名	発行年	開祖 関連	吉祥丸 関連	小中高 生向け	合気道門 人の紹介	護身(術) の言及	他
1	男の舞扇	平凡、昭和30年12月号	1955						*
2	生きている名人達人座談会	キング11月号、昭和30年11月号(第31巻第13号)	1955						*
3	健康と護身の新スポーツ	キング12月号、昭和30年12月号(第31巻第14号)	1955				*	*	
4	合気道	小説公園、昭和30年11月号(第6巻第11号)	1955						*
5	宮本武蔵以上の名人-合気道名人 植芝盛平-	週刊読売(臨時増刊)、昭和31年5月号	1956	*					
6	私の言葉 植芝吉祥丸	週刊新潮、昭和35年12月5日号	1960		*				
7	女と合気道	オール讀物、昭和32年6月号(第十二巻第六号)	1957						*
8	生きている合気道史	オール実話、昭和32年3月号	1957	*	*				
9	希望訪問 日本合気道	冒險王(夏休み増刊号)、昭和32年9月号	1957						*
10	日曜武芸入門帳	日曜快週読本、No.56	1958	*					
11	合気道一日入門	警察文化、昭和33年1月号(第十巻第一号)	1958		*			*	
12	高校生気質アラカルト	高校時代、昭和33年11月号	1958				*		
13	誰にもできる護身術	中学生の友1年、昭和33年2月号	1958			*		*	
14	誰にもできる護身術第2回	中学生の友1年、昭和33年3月号	1958			*		*	
15	大宇宙に遊ぶ	中学生の友1年、昭和33年4月号	1958			*			
16	女性たちは自衛する	週刊アサヒ芸能、昭和33年4月13日号	1958	*			*	*	
17	優しくできる護身術	中学生の友1年、昭和33年5月号	1958			*		*	
18	金のかからぬ健康法(四)	オール生活、昭和33年6月号	1958		*				
19	合気道と少女	週刊朝日、1958年8月17日号(第63巻第36号)	1958						*
20	決定的瞬間	特集雑誌 剣豪版、昭和33年11月号	1958	*					
21	黒ばかまに手を出すな-合気道一日入門記	中学一年コース、昭和34年3月号	1959						*
22	無敵合気道	少年画報、昭和34年7月号	1959	*					
23	一芸に秀でる 合気道三級 大久保晴代さん	新女苑、1959年5月号	1959				*		
24	男にだって負けません 合気道	中学時代1年生、昭和35年10月号	1960				*		
25	合気道と植芝盛平	剣豪列伝集(第6集)、昭和35年2月号	1960	*					
26	武術にして舞である 合気道	時の課題、昭和35年8月号(第四巻第八号)	1960	*	*				*
27	私の秘密 鉄砲でもかなわない?	中学一年コース、昭和35年10月号(第4巻第8号)	1960	*		*			
28	合気道技術講座十 塩田剛三	近代柔道、昭和35年3月号	1960						*
29	大和撫子ここにあり(グラビア)	オール讀物、昭和36年3月号	1961				*		
30	読者のページ-合気道入門案内	週刊時事	1961						*
31	株式会社学校一日見学 大商証券株式会社	マゼンタ・ジャーナルNo.226、昭和36年3月10日号	1961						*
32	各流武道大会(グラビア)	剣豪列伝集(76号)、昭和37年8月号	1962		*				
33	碧眼 快侠伝(5) 西アフリカの白い巨人	時の課題、昭和37年8月号(第6巻第8号)	1962						*
34	合気道に動くフィッシュ・エージャー	週刊ハイライト、昭和37年9月12日号	1962				*	*	*
35	日本株は上昇する =現地に挺身する日本人たち=	時の課題、昭和38年1月号(第7巻第1号)	1963						*
36	東西の接点・アジアを往く <東南アジア・ルポ>	時の課題、昭和38年4月号(第7巻第4号)	1963						*
37	あかしはるか 合気道のごくい	ぼくら、1964年2月号	1964			*			*
38	現代のさむらい11 美しき合気道	剣豪列伝集(102号)、昭和39年10月号	1964		*				
39	空間を清める	週刊毎日グラフ、1965年5月23日号	1965				*		
40	70にして立つ"ガマ大将軍"	週刊週刊文春、昭和43年4月22日号	1968						*
41	宇宙の調和を乱すものは敗る 合気道創始者 植芝盛平	観光、1966年9月号	1966	*					
42	稽古ごと	日本之経済、1972年5月号	1972		*				
43	合気道	新しい女性、1972年11月号	1972				*		
44	"合気"の深みを語る	心情公論、1973年8月号	1973	*	*				
45	めがねと私	ニコニュースNo.93、1973年11月号	1973		*				
46	My Leisure 合気道園田直	週刊現代、昭和48年8月16日号	1973				*		
	合計			11	10	6	10	7	17

(出典：合気会資料から筆者作成)

合気道道場に、一日に10人あまりの問合せがあると報じられている³⁵。雑誌の影響力を使用して、戦後の平和の時代に即した理念を背景に、合気道が護身術としても有効であることが紹介され、広く一般にも身近に感じられる合気道への道筋が開かれているのだ。前節で見た、吉祥丸の方針が、雑誌記事においても展開されているのである。

本章では、戦前から戦後への合気道の変化を見てきた。戦前には合気道は、限られた層

³⁵ 「女性たちは自衛する」、17頁。

にのみ教授されていた。ただ、戦前においても女性への教授は行われ、性別は問われなかったことが確認できた。戦後には、合気道を一般に公開するという方針の大転換がなされ、1955年の初めての一般公開演武は、開祖だけでなく門人も演武を行う、当時としては異例のプログラムで開催された。ここには、誰もが親しめるものとして合気道を普及するという、後に二代目道主となる吉祥丸による決断があった。1950年代半ば頃より実践の場が増加するとともに、一般雑誌においても合気道が取り上げられた。そうした雑誌記事においても、開祖の武勇伝や技の卓越だけでなく、合気道が護身術としても有効であることが紹介されるなど、身近に親しめるものとして合気道が伝えられたのだ。そして合気道の一般普及が果たされると同時に、合気道は海外へも展開していた。次章では、海外展開について見ていこう。

III 合気道の海外展開

現在、合気道は140の国と地域に普及している³⁶。合気会では五級から八段までの段級制が定められ、初段以上を取得している有段者登録者数は、2026年1月15日時点で、国内の有段者数が110,245人、海外のそれは90,360人、内訳は、表2の通りである³⁷。また、毎年1月に、五段以上の高段者の推薦昇段が決定されるが、近年では、海外の該当者が多く、例えば2026年1月の五段以上の高段者の昇段者数は、国内385人に対して、海外610人であった³⁸。もちろん、グローバル化が進展している現在、例えば、海外にルーツを持つ日本人やその逆のケースも増えており、単純に国籍だけで何かを語ることの危険性はあるだろう。しかし、これらの数字から、合気道が現在、海外へ広く普及しており、今後もグローバル化が進む傾向を見ることはできるだろう。ただ国内での一般普及ですら、1954年頃からの本格化であったのに、海外への普及はどのように進んだのだろうか。本章では、まずは文献から、戦前と戦後の海外普及の様子を確認し、次に1960年代に実際に海外普及に携わった人物への聞き取り調査から、当時の状況を明らかにする。

表2 合気会有段者登録数国籍別一覧（2026年1月15日時点）

	男性	女性	性別不明	合計
日本	76,085	34,135	25	110,245

³⁶ 合気会 Web「合気会とは」<https://aikikai.or.jp/about/>、2026年1月23日最終閲覧。

³⁷ 合気会 Web「昇段昇級審査要項」<https://aikikai.or.jp/hombudojo/grading/>、2026年1月23日最終閲覧。「公益財団法人合気会令和8年鏡開き推薦昇段者一覧/The list of Kagamibiraki Grading in 2026」<https://aikikai.or.jp/pdf/suisen/2026.pdf>、2026年1月23日最終閲覧。表2について：休会、死亡を含む有段者登録数である。退会という扱いはない。国籍は本人の自己申告である。国籍と居住地が必ずしも一致している訳ではない。未申告や何らかの理由で国籍・性別の登録が未登録の会員がいる。会員登録・昇段登録が随時行われているため、数値は正確な有段者数を示すものではない。初段登録は15歳以上という現在の段級位制度のルールをもとに、15歳以上の会員を集計している。初段受験資格の年齢が満15歳以上という規定は1975年には既に定められていた。審査が既に実施済みでも、合気会に書類が未到着・未登録の場合は「有段者」としてカウントされていない。

³⁸ 合気会 Web「公益財団法人合気会令和8年鏡開き推薦昇段者一覧」、及び2026年1月23日合気会への照会。

アジア（除く日本）	8,313	1,433	0	9,745
中東	4,155	345	0	4,500
ヨーロッパ	38,795	6,905	7	45,707
アフリカ	2,025	127	0	2,152
北米	12,372	2,327	2	14,701
中南米	10,092	1,085	0	11,177
オセアニア	1,677	275	0	1,952
国籍不明	353	68	4	425
合計	153,867	46,700	38	200,605

（出典：合気会への照会から筆者作成）

3.1 戦前の合気道海外普及

第2章第2節では、1955年に既に海外への普及が開始されていたことが分かった。では、外国人を対象とした普及は、いつ始まったのだろうか。平成10年に吉祥丸によって戦前の状況が振り返られた、貴重な記述がある。

私が覚えている中で一番古いのは、マンガンという名で当時世界選手権を持っていたアメリカ人プロレスラーです。（中略）一週間か十日程度、で稽古をつけました。（中略）ただし、これは手ほどきをした程度で、道場に稽古に長期間へ通ったわけではありません。

他にも、手ほどき程度に指導した外国人は何人かいました³⁹。

稽古に毎日来た外国人というと、当時イタリア大使館の一等書記であったサルバドール・メドレー氏が最初ではないかと思います。（中略）昭和十六年頃であったと記憶します⁴⁰。

そして、メドレーは、戦争が激しくなって帰国し、連絡が途絶えたが、合気会と縁のあった彫刻家小野田宇花が、戦後ローマに渡った際にメドレーと会ったとの報があり、その後も、イタリアへ派遣された師範がメドレーと交流したこともここで記されている⁴¹。これらを見ると、戦前から外国人を稽古に受け入れており、国籍を問わない教授がなされたことが分かる。そして、稽古を継続的に続けた人物は、戦後にも縁が繋がったのだ。それでは、戦後の海外普及は、どのように進められたのだろうか。次節では、それを見ていこう。

³⁹ 植芝吉祥丸「戦後合気道夜話4」合気道探求15号、出版芸術社、平成10年、52頁。

⁴⁰ 同上。当時、門人で「皇武館」理事であった吉阪俊蔵の紹介。

⁴¹ 同上。小野田宇花は、表1の39の記事で「合気道3段の彫刻家小野田ハル」として紹介されている。

3.2 戦後の合気道海外普及

本節では、戦後の合気道海外普及を見ていく。戦前から、外国人へ向けての合気道の伝授は行われていたが、本格的な動きとなるのは、戦後である。稲賀は、合気道の海外普及に尽力した人物として、藤平光一（ハワイ他）⁴²、多田宏（イタリア）、田村信喜（フランス）、山田嘉光（アメリカ）、浅井勝昭（ドイツ）の名を挙げている⁴³。多田の著作では、この他に、戦後の合気道海外普及の功労者として、イギリスへ渡った千葉和雄、スペインの北浦康成が挙げられている⁴⁴。藤平の渡米は1953年⁴⁵、多田の渡伊は1964年⁴⁶、田村の渡仏は1964年⁴⁷、山田の渡米は1964年⁴⁸、千葉の渡英は1966年⁴⁹である。他に、1966年に渡米しニューイングランド合気会を設立した金井満也、1965年にオーストラリアに移住してオーストラリアとニュージーランドでの合気道普及の先駆者となり、1979年にベルギーへ移った菅野誠一が、同時期に海外に渡り普及を行った合気道家として、見受けられる⁵⁰。合気道の海外普及は、1960年代半ば頃までが、その草創期であったと見てよいであろう。現時点で確認されている戦後の海外普及草創期の資料は多くはないが、本節では、草創期の状況を文献より拾い出すとともに、海外普及の要点を見ていく。

稲賀によると、戦後の海外普及の幕開けは、1951年、望月稔による欧州での指導である。武術家で歴史家の加来耕三が編集した『日本武術・武道大事典』では、1951年に望月は渡欧し、柔道と合気道の指導に尽力したことが、欧州における合気道指導の嚆矢と記されている⁵¹。加来によると、1952年に阿部正がフランスへ留学し、学業と同時に、パリ在住の柔道家である川石酒之助の道場を拠点に合気道普及にあたり、以後7年間、フランスに滞在した。多田の著作では、フランスへの普及は「1951年望月稔、続いて阿部正、中藺睦晴、村重有利、野呂昌道、田村信喜各師範によってであり、1955年には阿部正氏の紹介により植芝道場の内弟子としてアンドレ・ノケ氏が来日している」と記されている⁵²。1958年の雑誌記事においても、次のような記述が見られる。

現在本部道場には、アンドレ・ノケさんという四十二歳のフランス人が、内弟子になつて道場の掃除や炊事まで他の内弟子さんと一緒になつてやりながら修行していられます。このノケさんはボルドウの葡萄園の息子さんで、フランスで柔道を教えていましたが、日本から合気道普及に行かれた阿部正六段に合気道を習つたが、真の精神を求めるには本部道場に行かなくてはダメだと、柔道場を閉

⁴² 藤平は1974年（昭和49年）に合気会を離れている。

⁴³ 稲賀『『合気道』の近代』。

⁴⁴ 多田『合気道に生きる』。

⁴⁵ 加来耕三編『日本武術・武道大事典』 勉誠出版、2015年、621頁。

⁴⁶ 多田『合気道に生きる』。

⁴⁷ メキシコ合気道山水会 <https://aikidoskxm.org/ja/legado-del-aikido/>、2026年1月6日最終閲覧。

⁴⁸ 同上。

⁴⁹ 同上。

⁵⁰ 同上。

⁵¹ 加来編『日本武術・武道大事典』。

⁵² 多田『合気道に生きる』、364頁。

鎖して日本に来られ、3年間の予定で目下修行中ということです。

パナマ公使のマルチエニスさんも習いに見えるようで、アメリカには藤平八段が出掛けて指導し、ハワイだけでも千二、三百人位習っている人があり、その他村重八段はビルマの警察学校の教育をされています⁵³。

前章第2節で見たノケは、戦後にフランスへ伝えられた合気道に影響を受けて来日した人物だったのだ。また、前章第2節で見た稽古に通ったパナマ公使が、引用中のマルチエニスと見られる。

アジア方面については、吉祥丸が「合気道の活動年表、昭和二十八年（一九五三）の項には、『村重有利師範、他一名、ビルマ国マンダレー警察学校に合気道指導のため、招へいされる』と書かれています」と記している⁵⁴。これは、経済界の実力者で合気道に尽力した岡田幸三郎に対して、日立造船の社長から、日本の戦後賠償の意味合いで合気道の人材をビルマへ派遣する申し出があったことに起因する⁵⁵。これらから、合気道の海外普及は、民間の動きで進められたと見られる。また多田による次の記述からも、それが確認できる。

植芝道場では、海外に先行した先輩たちによる、海外で合気道を専門に普及する者の守るべき3つのことがあった。①一人で行くこと（複数で行くと、どうしても人を頼る心が生じる）。②片道切符で行くこと。③余分な金を持たず、家から仕送りを受けず、アルバイトをしないことである⁵⁶。

多田は単独でイタリアに渡ったが、現地に滞在する日本人への紹介状を持つなど、現地日本人とのネットワークは存在した。また、多田の著作に次の記述がある。

ローマの ISMEO 東洋語学校を訪ねた。（中略）植芝道場で何度か耳にした「戦前植芝道場に入門し、稽古に励んだというイタリア大使館員」こそ、このメルジェさんだった。メルジェさんは植芝盛平先生を大変尊敬し、日本語の授業の合間に植芝先生と合気についてよく話されているという⁵⁷。

このメルジェを通じて、数人の青年がイタリアの多田の道場に入門した。彼は、前節で見たメドレーと同一人物と見て間違いないであろう。戦前に日本で受け入れた外国人が、帰国後も合気道を語り、戦後の海外普及にも協力したのだ。多田の著作では、他にも合気

⁵³ 高松美智子「合気道一日入門」警察文化 1958年1月号、第10巻第1号、108頁。促音便大文字は原文ママ。

⁵⁴ 植芝吉祥丸「戦後合気道夜話1」合気道探求12号、出版芸術社、1996年、75頁。

⁵⁵ 同上。後に、山口清吾が派遣された。

⁵⁶ 多田『合気道に生きる』、285頁。

⁵⁷ 同上、287頁。

道普及に協力した複数のイタリア人について述べられている⁵⁸。

多田は渡伊を決意したきっかけについて、イタリアを訪れた経験のある友人や知人との交流を挙げている⁵⁹。イタリアの事例からは、身近な交流が契機となり単身での渡伊に挑戦した合気道家が、現地の日本人とネットワークを築き、理解を示したイタリア人たちの協力を得つつ、普及が進められたことが分かる。

そして、スイスでの普及草創期については、次のような記述がある。

スイスの合気道は、1950年代の後半から、植芝道場に稽古に来ていたスイス航空のパイロットであるスカーニング氏とフレディー・ジャコ氏ほか数人の女性乗務員によってチューリッヒで稽古が始められていた。更にフランス語圏のローザンヌでも、フランスで合気道を習った人々によって稽古が行われていた⁶⁰。

ここからは、1950年代後半には、フランスを経由してスイスへ合気道が伝播し、海外での合気道のネットワークが形成されていたことが分かる。そして、ローザンヌのジャンマル・ブルニエがイタリアの多田へ講習会を依頼し、定期的な講習会が開催され始めた。イタリアでの拠点構築が、スイスへの普及にも影響したのだ。スイスではその後、ミラノ在住で活動を始めていた藤本洋二が隔月でスイスを巡回指導し、年三回、多田による講習会が開催された。さらに、イタリア在住でスイス人と結婚した池田昌富がスイスに移って、スイス全体を担当し、多田と藤本が年三回の講習会を受け持つ体制が長く続く⁶¹。海外へ渡った合気道家たちの協力体制により、海外普及が進んだのである。

以上のように、戦後の海外への合気道普及は、国内での合気道の一般公開に先立つ1950年代前半から始まり、1960年代半ば頃までがその草創期であった。それらは、民間による動きで始まったと見られ、イタリアとスイスの事例からは、単身で海外へ渡った合気道家の挑戦が、合気道と出会い魅了された外国人の熱意と呼応して、合気道の海外普及が進んだことが分かった。現地に根を張った合気道家の存在が、海外普及の要点だったのである。次節では、1960年代後半にイタリアのトリノで合気道普及に携わった人物のインタビューから、当時の普及状況の一端を明らかにする。

3.3 1960年代後半トリノでの合気道普及の一事例

本節では、1960年代後半にイタリアのトリノで合気道普及に携わった根本敏男へのインタビューから、普及が進められた状況の一端を明らかにする。根本は1942年生まれ、早稲田大学で合気道に出会い、四年間続けた後、損害保険会社に就職した。その後、アメリカへ語学留学し、1967年9月から1970年10月までイタリアに滞在。帰国後は音響関係の会社へ就職し、退職後に合気道を再開している。聞き取り調査は、下記の概要で行った。

⁵⁸ 同上。また、向井晃子「日本文化を背景とする『芸術』への育み—合気道家多田宏インタビュー—」年報 Promis4、神戸大学、2026年掲載予定、にも、イタリアでの合気道普及についての言及がある。

⁵⁹ 同上。そのひとは、第3章第1節の引用で言及されている小野田である。

⁶⁰ 同上、298頁。

⁶¹ 以上、本段落の記述は、多田『合気道に生きる』に拠る。

〈1960年代後半トリノを拠点とした合気道普及に関する聞き取り調査〉

第一回 日時：2025年7月8日

場所：バビーズ吉祥寺（東京都武蔵野市吉祥寺本町1-11-5 コピス吉祥寺 A館 1F）

第二回 日時：2026年1月18日

場所：星乃珈琲店高井戸店（東京都杉並区高井戸西3丁目4-2）

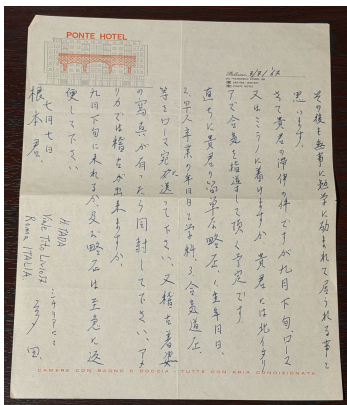
インタビュイー：根本敏男

聞き手・筆者：向井晃子

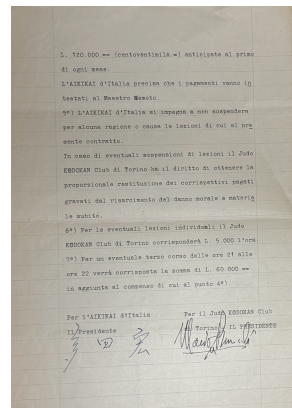
インタビュイー了承の上、内容を質問回答形式に整え、以下に記述する。

Q1：イタリアへ渡ったきっかけをお聞かせください。

A1:アメリカから日本への帰途、イタリアにおられる恩師多田先生への表敬訪問のご連絡を申し上げた。先生からは日本へ帰国後の予定の問合せを頂き、「特にございません」とお答えしたところ、「じゃあ、暫く居るか」という話に展開した。1967年7月に先生からのお手紙で、北イタリアで指導してもらう予定、とのご連絡を頂き(図3)、1967年9月下旬の私のローマ到着時には、北イタリアのトリノにある柔道場と多田先生との間で私の当該道場での指導契約書が締結されていた(図4)⁶²。柔道場を経営するイタリア人が合気道のメニュー設置を多田先生へ要請し、先生が応じられた経緯だった。ローマに多田先生が常駐、統括され、助手として北イタリアを私が、南イタリアを1966年に渡伊された池田さんという方が担当する三人体制となった。



(図3) 1967年7月7日付書簡



(図4) 署名入りの指導契約書

Q2:トリノでの合気道普及の状況をお聞かせください。

A2:トリノの道場は、公立競技場に併設の場所を、前述の経営者が借りて民間事業として運営していた。私の最初の稽古の時の道場生は20人位で、柔道や空手の経験者が多かった。私がトリノに到着した1967年10月には、地元の新聞が写真入りで報道してくれた(図5)。トリノで指導を開始して半年後位には道場生の数は経営者も驚く

⁶² 多田によると、イタリアでこうした契約書を交わしたことは他にはなく、珍しいケースであった。2026年1月19日、月窓寺道場師範室での会話より。

程の勢いで増えていた。更に、トリノ近郊の町、ミラノ、イブレア、ボゲーラにある道場から、私宛に指導要請が来た。トリノ道場との契約では週 3 日の指導だけでなく、これらの出張指導が加わったため、土日にも指導に赴き、休みの日はなかった。他にも、個人契約で行う個人レッスンの要請も増えた。道場の稽古と個人稽古を両方受ける人もいた。

Q3:北イタリアで入門された方の合気道に対する関心は、どのようなものでしたか？

A3: 道場生の多くが、技の習得だけでなく「気」に対する興味、関心があることが、彼らと話していて良く分かった。それに対応すべく、下記 A4 のような稽古を行った。個人レッスンをした当時 50 歳前後の自動車会社の技術担当役員の方が、高校、大学時代のボクシング経験を、「勝てばそれなりに嬉しいが、殴り倒した相手のことを考えると苦い思いもして 100% 喜ぶ気持ちにはなれなかった」と述懐され、「武道でありながら勝ち負けを争わず気というものを合わせる合気道を知り入門した」と話されていた。



(図 5) 1967 年 10 月 24 日、LA STAMPA 夕刊

Q4: 北イタリアでのお稽古内容は、どのようにされていましたか？

A4: 稽古では技の反復練習に加え気の錬磨や呼吸法も行った⁶³。時に、多田先生に教えて頂いたおりんを鳴らしてその音が消えるまで聞き続けて「有我有心」、「有我一心」といった境地を感じる稽古も行った。道場が用意した合気道の説明チラシは以下のように書かれていて好評だった覚えがある。“AIKIDO: La migliore via per allenare il corpo, calmare la mente e fortificare lo spirito.” 私なりの和訳では、「合気道: 身体を鍛え、心を静め、精神を強靱にする最良の方法 (道)」、英訳では“Aikido: The best way to train the body, calm the mind and fortify the spirit.”

Q5: 雇用や経済面、収入の状況などはいかがでしたか？

A5:当初の指導契約に加え、別の近郊 3 都市での指導や個人レッスンも増えたので経済的な問題はなかった。トリノ道場との契約では月額指導料は 12 万リラ (当時の換算

⁶³ 気の錬磨については、多田宏『生命の力を高める呼吸』世界文化社、2024 年に詳しい。

レートで7万円程)、他は私との直接契約だったが、個人指導は1時間5千リラ(同様に3千円程)で行った。道場が終わったあとに、個人レッスンに場所を使ったりもして、場所代を払うと言ったが、いいよ、と守衛に言われたりした。おおらかだった。

Q6:滞在先の確保等、生活面でご苦労された点をお聞かせください。

A6:嫌な思い出は特にはない。最初はホテルに滞在したが、支配人が日本人を珍しがって、親切にしてくれた。道場の近くに住む支配人の親戚の空き部屋を紹介してくれて、そこに住むことになった。部屋だけ借りる話だったが、そのうち、食事も用意してくれて、追加料金もなく、親切にしてもらった。当時日本人が珍しく、しかも合気道の先生だということで、自分を見にくるために、毎週末5~10人の人がその家に集まってきた。オープンでフレンドリーな人たちだった。

Q7: 指導面でご苦労された点をお聞かせください。

A7: 指導していて時折あった困った質問が「どうして合気道には試合がないんだ」というものだった。この質問に対しては、「合気道は気持ちを合わせる道で、勝ち負けを争うものではないので試合がない。しかし、習得する合気道の技はイザというときの役に立つ」という対応をした。質問した人達はその後も合気道をやめず、稽古を続けていたところを見ると一応納得したのではないかと思う。

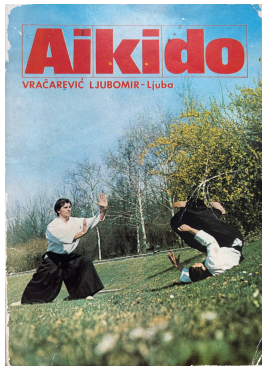
Q8:ユーゴスラビアで合気道をご指導された経緯と状況をお聞かせください⁶⁴。

A8:ユーゴスラビアの柔道連盟が、連盟の役職者2人と柔道家2人を1968年のローマでの多田先生の講習会に派遣した。講習会後に、ベオグラードでの講習会の要請が多田先生のもとに届き、先方の希望日程の事情で、トリノに居た私が派遣された。その後も講習会の要請は続き、1968年に1回、1969年に3回、1970年に2月、4月、7月の3回と全部で7回、期間は各1週間だった。開催場所は、ベオグラードだけでなく、リュブリャナ(現スロベニアの首都)や、ドブロクニク(現クロアチア南部)にも広がった。1969年には、イタリア遠征中の早稲田大学合気道会の学生3人を連れて、ベオグラードへ赴いた。1970年2月には、ユーゴスラビアの合気道連盟が設立され、1968年にローマに視察に来られた柔道連盟の役職者のザゴラック・ミラン氏が会長に多田先生が連盟師範に、私がナショナルコーチに就任した⁶⁵。ユーゴスラビアからイタリアの講習会や日本の本部道場への稽古に参加する熱心な人も現れ、そのような一人であるリュバという人物が、後年、ユーゴスラビアで合気道の本を2冊出版し、1970年代後半に彼が日本に来た時にこれら2冊の献本を受けた(図6、図7)⁶⁶。

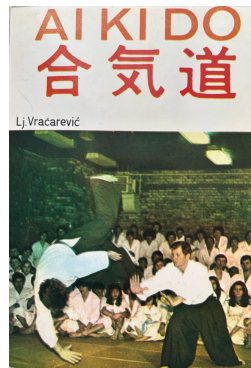
⁶⁴ 本稿で「ユーゴスラビア」とは、1963年から1991年まで存続したユーゴスラビア社会主義連邦共和国を指す。

⁶⁵ 根本敏男「ユーゴスラビアにおける合気道②」合気道新聞125号(1971年2月10日)に、ザゴラック・ミラン氏の会長、多田の連盟師範、根本のナショナルコーチへの就任が執筆されている。

⁶⁶ VRAČAREVIĆ, LJUBOMIR-Liuba, *Aikido*. Lj.Vračarević, AIKIDO, SPORTSKA KNJIGA, 1977.



(図6) Aikido



(図7) AIKIDO, 1977年

本インタビューでは、アメリカへ語学留学した一個人が、渡伊していた師匠とのつながりからイタリアでの合気道普及に関わる中で、急速に普及が進んでいった様子が話されている。トリノの事例では、現地に住んだ合気道家が経済面で困らない状況が成立し、親切的な対応も受けていた。当時、日本人への興味や、合気道の精神性や「気」についての関心が向けられており、そうした動きが普及を下支えしていたのである。また、ここではユーゴスラビアへの普及の経緯も語られている。前節で見たスイスでの事例と同様に、ここでもローマを拠点とした多田への要請がきっかけとなり、根本を介したユーゴスラビアへの合気道の普及が始まったのである。本インタビューはトリノでの一事例であるが、当事者による貴重な証言である。

本章では、戦前から外国人への合気道の教授が行われており、戦後は一般への合気道公開に先立って、海外への普及が開始されていたことが明らかになった。合気道の海外普及は1950年代前半から1960年代半ば頃までが草創期で、その時期に海外へ渡った合気道家が先駆者となって活動した。前章で見た、1955年の合気道一般公開演武の演武者だったノケは、そうした戦後の合気道海外普及の結果、来日した人物だったのだ。イタリア、スイス、ユーゴスラビアの事例からは、ローマの合気道家を介して、普及が進んだ様子が分かった。合気道に対して現地での興味が向けられたタイミングで、現地に生活の根を張った合気道家のネットワークが築かれたことが、合気道の海外普及に大きな役割を果たし、急速な拡大を可能にしたのである。

IV おわりに

本研究では、近代に発祥した日本独自の武道である合気道をテーマに、その戦後の展開を見ることで、日本社会における文化の変容とその展開の一端を明らかにした。日本近代において、欧米の“art”の訳語に当てはまらない、日本の文化的背景を持つ精神的な営みである「芸術」が「道」として近代化する中、合気道は、戦前の限られた層を対象とした開祖の個人的な教授から、戦後の一般普及へと変容を遂げた。そこには、社会状況に応じた決断と挑戦があった。

国内普及においては、後に二代目道主となる植芝吉祥丸が合気道の一般公開を決断し

た。そこには、戦後の合気道は、開祖の技の卓越を伝えるだけでなく、誰にも親しまれる必要があるという判断があり、1955年の初の一般公開演武は、開祖だけでなく門人も演武を行うという、当時の慣例を破るスタイルで行われた。1955年から1973年までの一般雑誌で取り上げられた合気道関連記事を分析した結果にも、開祖の紹介だけでなく、合気道が護身術としても有効であることが紹介されるなど、合気道が身近に親しまれる方向性での記事があり、同様の方針が見て取れた。同時に1950年代後半には合気道を実践できる場も増え始め、国内での合気道の一般普及が進んでいったのだ。

海外における合気道普及は民間の動きであり、1950年代前半から1960年代半ば頃までが、その草創期だった。この時期に海外へ渡った合気道家たちが草分けとなり、各国での合気道普及が進められた。イタリアの事例からは、単身で渡航して現地に生活の根を張った合気道家の挑戦が、現地の合気道への関心と呼応して急速な普及が果たされ、スイス、ユーゴスラビアへもイタリアを介した波及があったことが判明した。

現在、合気道を取り巻く状況はさらに変化を遂げ、先述の通り2026年1月の五段以上の推薦昇段者数では、日本国籍以外の昇段者が多い現状がある。日本社会においてもグローバル化が進み、在留外国人の増加、さまざまな文化の流入や、社会の高齢化があり、インターネットの普及による生活の変化が生じるなど、戦後間もない時期とは大きく異なる社会状況となっている。また、学術研究の進展に伴い、世界的な美術の枠組みにおいても、「近代」の問い直しが進み、西欧中心に偏っていた視点への批判から、周縁へも目が向けられるようになった。そのような中で、武道に限らず、書道や華道、茶道というような文化系のジャンルも含め、近代に「道」と読み替えられた日本独自のジャンルが注目され、語られることにより、西欧近代の芸術観に影響を受けた日本の近代の規定がさらに明らかにされるとともに、日本の文化的背景を持つ精神的な営みとしての芸術観もまた相対化され、より広い視点から捉えられるであろう。本研究は、その探索的な一考察である。

参照文献

〈未公開資料〉

VRAČAREVIĆ, LJUBOMIR-Liuba, *Aikido*

合気道演武パンフレット「合気道演武次第」、「演武次第/合気道について」、1955年。

合気会 Web「合気道とは」<https://aikikai.or.jp/aikido/>、「公益財団法人合気会令和8年鏡開き推薦昇段者一覧/The list of Kagamibiraki Grading in 2026」

<https://aikikai.or.jp/pdf/suisen/2026.pdf>、2026年1月23日最終閲覧。

メキシコ合気道山水会 <https://aikidoskx.org/ja/legado-del-aikido/>、2026年1月6日最終閲覧。

〈公開資料：定期刊行物〉

「女性たちは自衛する」週刊アサヒ芸能 1958年4月13日号、東西芸能出版社、1958年、17-18頁。

植芝吉祥丸「稽古ごと」日本之経済 1972年5月号、経済新潮社、15-16頁。

植芝吉祥丸「戦後合気道夜話1」合気道探求 12号、出版芸術社、平成8年、72-76頁。

植芝吉祥丸「戦後合気道夜話2」合気道探求 13号、出版芸術社、平成9年、30-34頁。

植芝吉祥丸「戦後合気道夜話4」合気道探求15号、出版芸術社、平成10年、48-52頁。
植芝吉祥丸「だれにもできる護身術」中学生の友1958年2月号、小学館、132-133頁。
高松美智子「合気道一日入門」警察文化1958年1月号、第10巻第1号、106-108頁。
根本敏男「ユーゴスラビアにおける合気道②」合気道新聞125号（1971年2月10日）。

〈公刊資料：書籍・学術論文〉

Lj.Vračarević, *AIKIDO, SPORTSKA KNJIGA*, 1977.

合気ニュース編集部編『植芝盛平と合気道 I 開祖を語る直弟子たち』合気ニュース、2006年。

佚斎樗山著、石井邦夫訳注『天狗芸術論・猫の妙術全訳注』講談社学術文庫2218。

稲賀繁美「『合気道』の近代—その戦前から戦後への断絶と継承」E・クロッペンシュタイン編『日本文化の連続性と非連続性1920-1970年』勉誠社、2005年、297-321頁。

植芝吉祥丸『合気道一路』出版芸術社、1995年。

植芝吉祥丸著、植芝守央監修『合気道開祖植芝盛平伝』出版芸術社、2016年。

植芝守央『植芝吉祥丸道主の肖像』出版芸術社、平成12年。

植芝守央『合気道その歴史と技法』日本武道館、2022年。

加来耕三編『日本武術・武道大事典』勉誠出版、2015年。

工藤龍太『近代武道・合気道の形成:「合気」の技術と思想』早稲田大学出版部、2015年。

多田宏『合気道に生きる』日本武道館、2018年。

多田宏『生命の力を高める呼吸』世界文化社、2024年。

向井晃子『戦後前衛書に見る書のモダニズム:「日本近代美術」を周縁から問い直す』三元社、2022年。

向井晃子「日本伝統文化を背景とした「芸術」と「観想」—合気道家多田宏の稽古の言葉より—」年報 Promis3(1)、神戸大学、2025年、77-85頁。

向井晃子「日本文化を背景とする『芸術』への育み—合気道家多田宏インタビュー—」年報 Promis4、神戸大学、2026年掲載予定。

〔附記〕本稿執筆にあたり、公益財団法人合気会並びにご対応いただいたご担当の方々、入江康仁師範、入江嘉信師範、多田宏師範、坪井威樹師範、根本敏男氏にご協力を賜りました。末筆ながらここに記し、深くお礼申し上げます。